

(続紙 1)

京都大学	博士 (農 学)	氏名	友澤 悠季
論文題目	飯島伸子における「環境社会学」の射程 —問いとしての「公害」の再提起—		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文は、日本における環境社会学の創設者のひとりであり、環境社会学会の初代会長になった飯島伸子を研究対象として取り上げ、飯島における学問形成の過程と、1965年から2000年に至る社会学と科学技術史を中心にした学問研究の状況、それをとりまく日本の社会状況とその変化を対象とし、それぞれの関連を明らかにし、なぜ飯島が環境社会学を構築するに至り、新しい学問分野にどのような研究の可能性を見出そうとしていたのか、その過程を明らかにした研究である。</p> <p>序章では、論文全体の位置づけと方法論的検討が行なわれている。前半部では、「公害」をどう位置づけるか、特に「環境」概念の登場が「公害」概念そのものにどう関係していくのかが問われた。後半部では、個別事例の実態研究から出発した飯島が、普遍的な理論研究へと進む時にどのような理論上の問題点が生じたかを、飯島個人の思想形成史の中から明らかにするという本論の方法論が提示されている。</p> <p>第1章では、飯島伸子が辿った人生と学問研究の全体史が述べられる。東京大学社会学研究室での研究と既存の社会学の枠組みの中で修士論文を完成するまでの時代、医学部保健学科に勤務し薬害スモン事件の調査加わり同時に『公害・労災・職業病年表』を作成し「被害構造論」の基礎となる調査を推進した時代、『環境問題と被害者運動』において「被害構造論」を提示し、消費者災害にまで論及した桃山学院大学時代、地球環境問題が社会的に大きく取り上げられ、社会学会の中から新たな環境社会学会の設立へと動いていく東京都立大学時代と、大きく4つの時代に分け、研究者としての飯島の調査と研究上の特色が整理し位置づけを行なった。</p> <p>第2章では、飯島は当初社会学の学問的枠組みの中で「公害」を扱おうとするが、1960年代当時の研究状況の中では「公害」を研究対象とすること自体にも困難性があった。このため飯島は、社会学研究室での研究と並行して、現代技術史研究会の災害分科会に属し、技術者を中心とした人々の災害に関する実態調査にも参加する。災害分科会では、むしろ社会的アプローチ自体の有効性が厳しく問われることになる。飯島の初期の研究が、社会学研究と技術史研究のふたつの基盤の中で揺れ動きながら、新たな研究方法の模索を行っていた過程を大量の資料と文献を駆使し、明らかにしている。</p> <p>第3章では、飯島が1980年代に提出した「被害構造論」と呼ばれた独自の理論を分析する。この理論は飯島の著書『環境問題と被害者運動』で提示され、環境社会学の学問的成果の一つとして位置づけられる。「被害構造論」が形成されるに至った飯島の思想的葛藤を、本論では飯島の数多くの原調査資料と諸論文の中から、この着想の起点が薬害スモン病への調査研究にあったこと、「被害構造論」は単に被害者の健康被害だけではなく家族や社会を巻き込んでいく被害の複合構造を明らかにし、その後の公害研究における社会科学と自然科学の結合の可能性を示すものとなったことを明らかにした。</p>			

第4章では、飯島の研究の中ではこれまで副次的な扱いを受けてきた著書『髪社会学』を取り上げ、公害研究と環境社会学研究との関係性を分析した。美容院における化学物質の利用とその被害の発生を、美容師における労働災害と消費者における健康被害と位置づけ、これを一体のものとして捉えることで飯島は新たな社会学を構想することができた。しかし、これらの研究は、新たな環境社会学に接続されることはなかった。労働災害と消費者被害を対象とした研究が、新たな社会的背景の中で問題群の所在の不可視化となることを論じた。

第5章では、1980年代後半になると日本社会学会の中においても、環境と社会が重要な研究分野として認められるようになる。飯島はその中心人物として、まず日本社会学会の中に環境社会学研究会を立ち上げた。1992年には、環境社会学研究会が発展して環境社会学会が結成されることになり、飯島はその初代会長となる。この時代の日本における研究状況と社会状況を、グローバリゼーション下における「地球環境問題の時代」として捉え、日本の研究状況が新たな課題に直面し環境社会学会が成立されるべき時期であったことを明らかにした。しかし、環境社会学会の設立によって、飯島自身の学問研究の中では新たな問題が生じてきたことを明らかにした。

終章では、論文全体の要約と共に、環境社会学の科学史的位置づけを行ない、飯島の研究方法の科学史上における意義を論じている。飯島の「被害構造論」をはじめとする諸論文は、「加害者」と「被害者」の両者を組み込む内部構造をもつことを明らかにすると同時に、科学技術研究と社会科学的研究とを結びつける新たな研究方法となりえたことを示した。特に、飯島理論が問題把握の始点と終点に人々の「被害」を位置づけており、常に「公害」への問いを提起し続けた点にこそ、飯島自身の研究者としての個性と学問の方法論における独自性があることを論じた。

注) 論文内容の要旨と論文審査の結果の要旨は1頁を38字×36行で作成し、合わせて、3,000字を標準とすること。

論文内容の要旨を英語で記入する場合は、400～1,100 wordsで作成し
審査結果の要旨は日本語500～2,000字程度で作成すること。

(続紙 2)

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、日本で初めて環境社会学会を立ち上げた環境社会学者のひとりである飯島伸子を対象として、飯島個人の思想形成と学問的方法論の確立の過程と、それを取りまく日本社会の状況と科学領域における変化の胎動とを結びつけ、環境社会学が学問として成立してくる過程を科学史的分析により明らかにした。また、飯島の方法論における独自性と環境社会学における飯島の問題提起の核心を思想史的な分析により明らかにした。評価される点は以下の3点である。

1. 飯島伸子の生涯と全研究過程に関する資料を、すべての著作だけでなく、遺品を整理することから開始し、公刊されていない手描きノートや検討メモなどを含めて、現在収集可能な最大限の資料を用いて、飯島の学問体系の全体像と思想形成の過程を詳細に分析し、提示したこと。

2. 環境社会学という学問が科学の一分野として構築され、やがて環境社会学会という新たな学会を形成するにいたった過程を、科学史の視点から分析し、その内部における理論形成の変遷と、学会を成立するに向かわせた社会的状況との相互関係を明らかにしたこと。

3. 飯島伸子の学問の核心が、「公害」は社会科学の対象となりうるか、社会科学は問題解決にいかなる貢献をなすことが可能か、という問いを発し続けている点にあり、結果として問題把握の始点と終点を常に人々の被害に置くという飯島独自の理論を確立することとなったことを明らかにしたこと。

以上のように、本論文は科学史、科学哲学の方法に基づき、飯島伸子の学問の思想形成を明らかにすることによって、環境社会学会という新たな学問分野の成立過程を独自の視点から位置づけたことにより、農学原論、科学史、科学哲学、社会思想史、生物資源経済学、環境社会学に寄与するところが大きい。

よって、本論文は博士（農学）の学位論文として価値あるものと認める。
なお、平成25年2月15日、論文並びにそれに関連した分野にわたり試問した結果、博士（農学）の学位を授与される学力が十分あるものと認めた。

注) Webでの即日公開を希望しない場合は、以下に公開可能とする日付を記入すること。
要旨公開可能日： 年 月 日以降